子ども会（学習会）だより
MY SKY 号外
マイ・スカイ
1997年10月7日火曜日発行（毎週火曜日きまぐれ発行）

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責：吉成正士

一本の大根として ～進路を見つめる子どもたち～

1

３年３組では，「なぜ高校へ行くのか」というテーマで話し合いがもたれていた。その途中で，とつぜん高雄が立ち上がった。

「いいかげんにしてくれ。おまえらの話を聞いていると，ムカムカしてくるわ。泣きとうなってくるわ。何のために高校へ行くのか。自分のカノーセイをためすためです。世の中のムジュンを見ぬく目を養うためです。差別とたたかうためです。え，ほんまか。ほんまにそう思うとんのか。そんなら聞くけどな，おれら，どないなんねん。」

高雄の声はふるえていた。

「きのう先生は，おれに，高校は無理やて言うとったわ。そら，おれ，あかん。あかんから『促進』でがんばった。さぼったこともあるけど，おれとしてはいっしょうけんめいやったつもりや。せやけどやっぱりあかんのや。おればっかりやないで。弘司なんか，本もよう読まんやないか。そんなやつがようけおんのに，何が高校やねん。『何のために高校へ行くのか』いう言い方も，おかしいやないか。みんな，教えてくれや。おまえら，よう言うとるやないか，ぼくらはなかまや，て。」

教室の空気は，いっぺんに重くるしくなった。何の意見も出ないまま，討議は中断されてしまった。

2

次のホーム・ルームの時間，みんなが書いてきたものを持ちよった。

○

ぼくは，高雄が言ったことばに，頭をガツーンとなぐられたような気がした。ぼくたちは，ひとりの苦しみをみんなのものに，などとカッコイイことばをモットーにしてきた。それなのに，進学が近づくにつれて，いつのまにか，自分のことばかりを考えるようになってきたのだ。

ぼくは，いま苦しんでいる。父や母は，少しでも，いわゆる程度の高い高校へ行けと言

う。理由は，大学に合格するためには，そんなところでもまれないと，学力がつかないというのだ。ぼくはひとりっ子だから，両親は大きな期待をかけている。自分たちが学校を出ていないために苦労したので，自分たちの願いをぼくにかけているのだ。その気持ちがわかるので，ぼくは両親の意見に反対しきれないのだ。いまぼくは，どう考えたらいいのかわからなくなってしまっている。

○

いまの世の中は高校ぐらい出ていないと，自分が不利になるようになっているのではないでしょうか。ある程度の学歴をつけておかないと，社会に出てもばかにされるし，仕事についても，単純作業のような仕事しかやらせてもらえないと思います。それに，いろいろ勉強しておくと，生活していくうえで便利なことがたくさんあると思うのです。今すぐに役に立たなくても，将来，きっと何かの役に立つことがあると思います。

○

この前のホーム・ルームは，正直言って，またかと思った。このクラスのものは仮面をかぶっている。心の中では自分のことしか考えていないくせに，すぐ，差別されている立場で考えるべきだ，勉強できないものの苦しみを受けとめるべきだ，と言う。

勉強できないものは，努力がたりなかったからではないか。学校でわからなかったら，塾に行ってでも勉強したらいいんだ。自分がサボっていて，いざ進学というときにやいやい言うのは，負け犬だ。世の中はそんなにあまくない。うちの父は，裸一貫から今の地位を築いてきた。人が遊んでいるときに，歯をくいしばってがんばったということだ。いっしょうけんめいに努力してよい成績をとったものが，一流大学へ行って，よい会社にはいったり，えらくなったりするのはあたりまえだ。

将来，幸福な生活をしたかったら，若いうちに苦労しなければならないと思う。人間は，結局，自分のことしか考えないのだから，自分の将来は，自分の力で切りひらいて行くしかない。

○

わたしは高校，行かない。ほんとは行きたい。でも，せいせきがよくないし，しけんうけても合かくできないと思う。しりつの高校はお金がかかるので，おかあさんの内しょくだけでは，とても行けない。おとうとや，いもうともいるので，わたしは，はたらいておかあさんをらくにしてあげたい。

おとうさんがなくなってから，おかあさんは朝からばんまで働くだけでした。学校のさんかん日にも，来てもらえなかったくらいです。わたしは，うちのおかあさんといったら，ミシンをふんでいるかっこうしかうかんできません。

しりつの高校は，なんじゅう万円もかかるとききました。こんなこと，うちではできるはずがない。みんながお金の心ぱいをしないで，みんながなかよくおなじ高校へ行けたらいいと思います。わたしは，みんなが高校のはなしをしているときは，ものがいえない。何か，くやしい，かなしいきもちがします。

3

浩一の司会で，討議にはいった。しかし，最初の発言がなかなか出ない。

「みんな，ものを言わへんのは，なんでや。ほんとのことを出し合おう，いうことで書いてきたんとちがうんか。思っていることを出してくれや。」

それでも，すぐ手をあげるものはいない。浩一がクラスのものを見まわしたときに，芳夫と目が合った。よく話し合う仲だ。芳夫を指名した。

「みんなの作文を聞いていると，なんや言いたいことがいっぱいあるんや。自分の将来のために自分だけ努力しとったらええんや，いうのを聞いていたら，腹が立つ。そいでも，ぼくの気持ちの中にも，同じようなところがあるかもしれん。いや，あるんや。だから腹が立つんやと思う。そやから言わなあかんと思うのに，言うたらちがうこと言うみたいで，ものすごう，言いにくいんや。」

和美が言った。

「わたしも，芳夫君の言うとおりだと思います。そやけど，言い表せないから言わない，などと言ってたら，クラスで考え合うことができなくなってしまいます。ほんとに仲間を信じ，みんなで伸びていこうという，クラスの目的はどうなりますか。おたがいに努力して，ほんとのことを出し合っていくなかで，少しずつでもわかり合っていくことができると思うんです。」

忠夫が言った。

「それで，自分のことはどうなんや，和美。それを言わんとあかんやないか。おれは，おれのことを言う。『勉強できるやつが一流大学へ行って，えらくなるのはあたりまえや。』言うてるけど，ほんまにあたりまえやろか。今の社会で『えらいやつ』いうたら，どんな人らを言うんや。うちのオヤジ，高校なんか行ってへん。オヤジは鉄工所づとめや。作業服の万年行員や。いっしょうけんめい働いている。おれ，オヤジえらいと思うてんねん。」

「おまえのおとうさんがえらいとかえらくないとかいう問題とちがうやろ。ただ，今の世の中は，きびしい競争の社会やと思う。助け合いや協力なんて言ってられるのは，中学

校までや。中学校でも，ほんとのところは，高校にはいるための競争があるやないか。みんな心のなかでは，いい高校へはいって，いい大学行って，課長，部長になりたいと思うてるのとちがうか。ええ悪いは別にして，試験の成績で進路を決められるのが現実や。父がいつも言うてるんやけど，社会が悪いって言うとるやつは，自分がしっかりせえへんかったものや。競争があるなら，それにうちかっていくのが人間らしい生き方や，いうことや。ぼくもそう思う。」

忠夫が，すぐに反論した。

「それやったら，現実をそのままうけ入れることになるやないか。おれら，部落問題を考えてきたのは何のためや。現実のまちがっているところを見ぬいて，たたかうためやったんとちがうか。今の世の中には差別がいっぱいある。高雄が言うたことや，高校へ行きとうても行かれへんのや，いう作文，どない思うねん。」

「自分がしっかりしてたら差別されへんのや。ぼくは，差別されない人間になるためにいい高校へ行くんや。いっしょうけんめい勉強するのは，そのためや。ふだん，勉強やらんとって，今ごろになって勉強できないもののことを考えろ，と言うのは虫がよすぎるわ。世の中はピラミッドみたいなもんや。努力するものが，その頂点にすわるのは当然や。」

他のものも発言した。しかし，堂々めぐりのようになって，話がすすんでいかない。

4

浩一が，どう論議をすすめていったらいいのか考えあぐねていると，弘司がぼそっとつぶやいた。

「おかしいなあ。おれ，わからんわ。」

みんなが弘司の方を見た。

「なにがわからんのや。」

「そやかて，なんで，こんなむずかしいことやってるんや。みんな，高校へ行けたらええのやろ。中学みたいに，みんな同じとこへ。行かれへんものがいるから，ややこしゅうなるんや。」

高雄がすぐ言った。

「弘司，おまえもおれも，その行かれへんものとちがうか。」

「そうや，おれ，アタマわるいさかいなあ。」

「なに，アタマわるい？それなんや。なんでアタマわるいんや。そんなんで，おれはあき

らめられへんで。」

みんな，はっと気づいた。アタマがわるいと，弘司はあきらめている。「いい高校へ」というのはおかしい，とわかっていても，これもあきらめている。それでいいのか，ということだ。

「なあ，先生。眠っとらんと，先生の意見，言うてえな。どないにも，ならんやないか。」

高雄が，教室の後ろで腕を組みながら，じっと聞いている先生に言った。

「うん，くるとこまできたということやな。」

先生は，つづけた。1年，2年と，みんなで力を合わせてやってきた。だが，高校に行くとなると，自分たちの意志とはちがうところで生きかたを決められてしまう。一流校，二流校，三流校と，大根を切るように輪ぎりにされてしまう。その輪ぎりを，先生自身もやってきた，というのだ。

「すると，おれは，はみだした大根のしっぽというわけか。そうか，先生。」

高雄の目は，光っていた。先生の目と，がっちり合った。

「そうだ。おまえは大根のしっぽだ‥‥いまはな。」

「クソッ。大根も，しっぽもあるか。おれは，負けへんぞ。」

高雄は，こぶしで机をたたきながら，くやしがった。

先生は言った。

「高雄，やるか。ぼくもやる。時間ぎりぎりまで，あらためて，やりぬく。」

「うん，やろうや。いっしょに高校に行こうや。」

「高校に行って，おれらの努力で学校を変えるんや。」

そうなんだ。たとえ，いまはしっぽでも，葉っぱでも，一本の大根だ。一本でなくてはならんのだ。‥‥みんな、それぞれの思いをかみしめていた。